

Michelle Cliff と「ナニー」たち
——カリブ海英語圏の女性作家 その1——

風呂本 惇 子

Summary

Michelle Cliff and Her "Nanny" Characters —Anglophone Caribbean Women Writers, Part I—

Atsuko Furomoto

Among those who have enriched the list of "Caribbean Afro-American women writers" since the 1980 s, Michelle Cliff from Jamaica is conspicuous for her preoccupation with "Nanny," a legendary woman warrior of the Maroon armies of Jamaica in the 18 th century. The Maroon armies consisted of those fugitive slaves who hid in the mountains and sustained a guerrilla warfare against the oppressors. Michelle Cliff has kept describing spiritual descendants of Nanny through her three novels published so far.

Abeng (1984) and *No Telephone to Heaven* (1987) are related works. *Abeng* is a story of a Jamaican girl Clare Savage's coming of age, in which Cliff inserts legends of Nanny rather episodically, and even puts Nanny characters in Clare's family history. The whole story, however, narrates how the protagonist Clare grows up into a "crossroads character" with her body and mind in two worlds. The word "abeng" means conch shell. "The blowing of the conch shell called the slaves to the canefields," but on the other hand, it was "the instrument used by the Maroon armies to pass their messages and reach one another." This title seems to imply that any "crossroads character" has to decide which use of abeng as symbol he/she should choose. The first work is the preparation for the next work *No Telephone to Heaven*, in which the protagonist, after long wandering in the United States, England and Europe, comes back to Jamaica, confronts the sufferings of the people in the prevailing neo-colonialistic situation, and finally takes part in the guerrilla movement. Clare ends her life as one of those nameless women who did not forget resistance.

Although the protagonist who partly represents the author herself ends her life, it does not mean Cliff has ceased to describe Nanny characters. In the third novel *Free Enterprise* (1993), Cliff describes the comradeship between two black women who took part in the planning of John Brown's raid on Harpers Ferry on Oct. 16, 1859. Mary Ellen Pleasant is a factual African-American woman on whose gravestone runs the inscription "she was a friend of John Brown." Cliff creates Annie Christmas, a Jamaican woman who voluntarily plunges into the abolitionist movement and finds a kindred spirit in Pleasant. Here again, Cliff provides us with two "Nanny" characters—one factual and one fictitious.

カリブ海地域の女性による文学作品は、19世紀半ばから既に世に出ていたということだが²¹⁾、注目されることはほとんどなかったと思える。カリブ海の文学と言えば、大かたの人は1930年代から70年代にかけて、一時的にせよ恒常的にせよ故郷の島を離れ、「宗主国」の首都パリあるいはロンドンを活動の拠点として、反帝国主義・反植民地主義の声を上げた男性作家²²⁾の活動を思い浮かべるであろう。1980年代になると、このような一般的状況に明らかな変化が生じた。女性詩人・作家の出版活動が急速に活発化したのだ。英語圏²³⁾では、ジャマイカで出版されたアンソロジー *New Poets From Jamaica* (1979) で、13人中、女性詩人が7人取り上げられたあたりが転機のようなのだが、おそらくカリブ海の他の語圏（仏語、スペイン語、オランダ語）にも同様の動きがあったのだろう。注1で触れたカリブ海女性作家アンソロジー *Her True - True Name* (1989) では、オランダ語圏が入っていないのが惜しいが、収められている英・仏・スペイン語圏の作品のほとんどが1970～80年代のものであり、カリブ海に吹く新しい風を感じさせる。世界的な規模でうず巻いた女性解放運動の波、女性の意識と経済的地位の向上をもたらしたあの波が、もちろんカリブ海にも押し寄せたのだ。

また、故郷を離れて活動するのは先輩男性作家たちと共通でも、英語圏女性作家の場合、活動の場はイギリスではなく北米（アメリカ合衆国とカナダ）に集中している。さらに、エドウィッジ・ダンティカ（Edwidge Danticat）のように仏語圏ハイチに生まれながら、少女期にアメリカに移住し、故郷との関わりを英語で描く作家もいれば、故郷グアドループと往復しながら本拠地はアメリカに置き、仏語で大作を次々に発表しているマリーズ・コンデ（Maryse Condé）のような作家もいる。カリブ海に脱植民地体制の気運がみなぎった1960年代以降、アメリカの経済力がイギリスの政治支配を圧倒したのは確かである。だが、アメリカの文学活動に、イギリスにはない可能性を見いだして女性作家たちがひきつけられた面もあるのではないだろうか。たとえば、16歳のとき故郷アンティーグアを出て渡米したジャマイカ・キンケイド（Jamaica Kincaid）は、「大英帝国」以外の別の世界を初めて知り、特に「モダニズム」と呼ばれる小説、詩、映画を知ってからは二度とあの重圧の下へ戻る気になれなかったと言う。キンケイドの第一作、シュールレアリスムな文体で自己の成長期の心象を綴った『川底で』（*At the Bottom of the River*, 1983）は、植民地でたたき込まれたものの見方を解体するための、いわば実験だったと考えられる。

既存の文学の伝統にとらわれない自由な視点。斬新な表現手法。80～90年代英語圏カリブ女性作家の作品には、これらに加えて「自伝的要素」が目立つ。ダンティカにしてもキンケイドにしても、島での少女時代、アメリカへ渡ってから、年月を経て一時帰郷したとき、の各体験が作品世界のベースになっている。島を離れることによってその島の歴史的・空間的意味、そこで育った自己への意識は鮮明になる。家庭や学校での日常生活における私的な体験をひとつひとつ見直していくうちに、そこに潜在する公的な局面が少しずつあぶり出されていく。したがって、「自伝的」な書き方は、人種、性、階級、といったより大きなテーマへ向かう過程と

見なすこともできよう。このような歩みを作品を通して具体的に示している作家の一人に、ミッシェル・クリフ (Michelle Cliff) がいる。クリフは、ダンティカやキンケイドの新しい世代と、ローザ・ガイ (Rosa Guy), 故オードリ・ロード (Audre Lorde), ポール・マーシャル (Paule Marshall) などの「カリブ系アフロ・アメリカ女性作家」と呼ばれる世代⁴⁾の間に位置する中堅作家である。

ミッシェル・クリフは1946年、ジャマイカ、キングストンに生まれ、3歳から10歳までアメリカ、ニューヨークで暮らしている。その後ジャマイカに帰った彼女は、その地で肌の色がどれほどものを言うかを思い知らされる。アメリカでは肌色が薄かろうと黒人は黒人なのだが、当時のジャマイカでは同じアフリカ系でも肌色の濃淡が階級に結びつくのだった。「私の家族は“red”と呼ばれていた。ある程度の白さを意味する言葉だった。・・・肌の色のヒエラルキーでは、私は最も薄い階層にあると見なされていた」⁵⁾。白人だと言っても通用する肌の色と、土地所有者の祖母をもつクリフは、それなりに「特権」のある階級に属していた。彼女が意図せずしてその「特権」を行使した少女時代のことは、のちに恥と悔いのうちに短編・長編の小説の中で告白される。1960年代半ば、大学へ入るためにイギリスへ渡り、さらに大学院でルネサンスを専攻、1974年に比較文学の学位を取得。その後アメリカのさまざまな大学で教壇に立ち、現在はカリフォルニア州サンタ・クルズに住んでいる。1980年代に出版されたものには、散文や詩を集めた *Claiming an Identity They Taught Me to Despise* (1980), *The Land of Look Behind* (1985), そしてこれらに描かれた断片的スケッチを織り込む二つの自伝的長編 *Abeng* (1984) と *No Telephone to Heaven* (1987), 90年代には短編集 *Bodies of Water* (1990) と歴史上の事件に材を求めた長編 *Free Enterprise* (1993) がある。

Abeng はジャマイカ育ちで12歳のクレア・サヴィッジ (Clare Savage) が初潮を迎えるまでを、*No Telephone to Heaven* は、14歳で家族と共にアメリカに移民したクレアがイギリスとヨーロッパを遍歴したのち帰国して、36歳の若さで故郷の土になるまでを描いている。クレアがアメリカに移民する年齢や、最後にゲリラ活動に加わって命を落とす設定からして、作者と同一化はできないが、自分の体験の多くが投影されているクレアを、作者は “an amalgam of myself and others”⁶⁾ と言う。クレアの父方の高祖父は、ジャマイカに砂糖きび農園「パラダイス・プランテーション」を所有していたイギリス人判事、母方の曾祖母はアフリカ系の召使いとの間に子を身ごもり、家族と縁を切って駆け落ちした白人女性である。クレアがこうした先祖から受けついだ肌の白さ、肩まで垂れる栗色の髪、父譲りの緑色の瞳は、一族の間では貴重なもの (“the family’s crowning achievement, combining the best of both sides...” [p. 61])⁷⁾とされ、父のジェイムズ (通称ボーイ) からは「お前は白人なんだよ」とすら言われる。クレアは肌の色が自分ほど薄くない祖母、母、妹との絆を父がどう考えているのか、と戸惑う。学識が深く、さまざまな知識を与えてくれる父なのだが、ユダヤ人に対するナチスの行為についてクレアが説明を求めたときに彼があいまいな反応を示した頃から、クレアの中に父への離

反感情が芽ばえていく。

作者は主人公に、そのどっちつかずの存在を表すような名前を与えている。「クレア」は“clarity”, つまり (肌の) 色の澄んでいることを示す名前である一方、「サヴィッジ」は彼女がカリブ系の先祖——“cannibal”という語の語源だと言われる人々——から引きついだ「野蛮な」血を連想させ得るからだ。ところが、母のキティ (Kitty) が「クレア」という名を選んだのは、自分が病気だった幼い頃に献身的に看病してくれた、頭は少々鈍いが心やさしい田舎娘クラリー (Clary) への感謝の念からだ。キティは都会好みの“ボーイ”と結婚した後も、母 (クレアの祖母) ミス・マティ (Miss Matty) の所有する田舎の土地と、その周辺に生きる肌の色の濃い貧しい人々に対する親愛の情を断ち切ることができなかった。その感情は、土地所有者だが、頼ってくる者にはいつでも食べ物に分けていたミス・マティから彼女が受け継いだものだ。キティは夫の価値観に遠慮して、口に出して伝えることはしなかったが、折りを見ては娘をミス・マティの住む田舎の森や川へ連れていき、薬草を示して教え、娘の内にジャマイカの土地そのものに対する愛情を育もうとした。娘に継がせることのできなかった彼女の結婚前の姓は「フリーマン」(Freeman) である。一方、彼女の夫が出自を誇る「サヴィッジ」家の先祖の判事は、奴隷解放令が出る前夜、プランテーションの奴隷小屋に火をつけ、奴隷たちのほとんどを焼き殺したという人物である。「サヴィッジ」はこのイギリス人の「残忍さ」をまさに物語る姓であった。表面上同一のものが、二つの異なる意味を内包する。それは、タイトルに使われている「アベング」についても言える。「アベング」とはホラ貝を指す西アフリカの言葉であり、ホラ貝はこれを吹いて奴隷たちを砂糖さび畑へ呼び集めるのに使われた。だが、他方、それは奥地へ逃亡した奴隷たちの集団「マルーン」が互いにメッセージを伝えあうのに使う道具でもあった⁸⁾。

「マルーン」の語源はスペイン語の“cimarrón”。“cim”は「山頂」を指すので、「山頂に住むもの」の意味がある。クリフは、本来“unruly, runaway cattle”を指したが、そこから派生して“maroon”という語に“fierce, wild, unbroken” [p. 20] といったイメージが伴うようになったと説明している。イギリスがこの島を占拠した1655年から奴隷制度が廃止される1834年までの180年間に、マルーンのゲリラ活動は絶えることがなかった。1720年頃このマルーン団の指導者の位置についたと考えられているのが、伝説的な女闘士ナニー (Nanny) である。時が経つと、「ナニー」という呼び名は固有名詞でなく、コミュニティの中で「治療の力をもち、アフリカの伝説、習慣、音楽や歌を目下の者たちに伝え、自分たちの文化遺産に対する自信と誇りを吹きこむ賢い女性」のタイプを指すようになり、さらには幼い子供の面倒を見られる老女を言うようになる⁹⁾。西アフリカ、アシャンティの出身で、白人の齒をつないだ首飾りをかけた小柄なその老女は、魔法も使え、治療の術にも秀でる。自分の隊を率いて島の反対側にいる別のマルーン団の指導者クジョー (Cudjoe) に、協力してイギリスの軍隊に立ち向かうと呼びかけに行く。クジョーは申し出を拒否し、のちに彼らだけで英軍と和平協定を結ぶ。裏切り者が出てナニーは殺されるが、ナニーの同志たちはナニー・タウンと呼ばれるブルーマウンテンの裂け目を拠点として1740年ごろまで、いわゆる第一次マルーン戦争を闘い続

ける。作者は、クレアの通う私立学校セント・キャサリンでは「決して教えないもの」として、このような島のもうひとつの歴史を語りの中に挿入してゆく。その断片的な記録の挿入は、12歳の少女の成長の物語とどう係わっているのだろうか。

マルーンの話の点在は、学校で正規に教えられることはなくても、島の空気に漂う伝説がいつのまにか人々の意識下に浸透していくさまを表しているのかもしれない。ミス・マティの住む村の女たちは、農作物を売りにトラックの荷台に体を寄せあってマーケットへ向かう途中、アコンボン・タウン——“the oldest settlement of freedmen and freedwomen in the western hemisphere” [p. 81]——へ通じる小道を通過するとき、神秘に包まれたマルーンの子孫の姿を垣間見ようとして、いつもそちらの方角に顔を向ける。クレアが祖母の家で夏休みを過ごすときの唯一無二の遊び友達ゾウイが通う村の公立学校の、恒例の学芸会の中でもマルーンの幻は現れる。その学校の教師は、イギリス政府から毎年送られる同じ教材に怒りを禁じ得ない。たとえばワーズワスの“Daffodils”を、学校中の生徒が“spoken with as little accent as possible; here as elsewhere, the use of pidgin is to be severely discouraged” [p. 84]という条件つきで暗記しなければならない。亜熱帯の島で見られるはずのないその花の絵が、折り込みページで添えられている。(この教材は世界中の英領植民地の学校に送られ、アンティグアで学んだキンケイドもこの花の詩に関する苦い記憶を、自伝的な小説 *Lucy* に織り込んでいる。) この教師が学芸会を見に集った聴衆の前で、思い切ってゾウイに暗唱させる詩は、マルーンの娘を歌ったものだ¹⁰⁾。そこで描写される野山の風景もハイビスカスの花もよく知っている聴衆は、絵の助けがなくてもマルーンの娘の姿を各自の想像力で呼び起こすのだった。

ナニーの話の挿入は、サヴィッジ家の過去が明かされていく過程で登場する二人の女性の存在とも関連がありそうだ。一人はマルーンの娘で、ある奴隷から銃を受け取るべくプランテーションに近づき、つかまってサヴィッジ判事の情婦にされたイネス (Inez)。もう一人は判事の子を生みたくないイネスが相談に行った相手で、薬草と魔術の知識もあり、仲間にアフリカの習慣を教えて尊敬を受けていたムマ・アリ (Mma Alli)。奴隷解放の前夜、イネスは生活手段をもたぬ奴隷たちの将来にそなえて、土地と農機具を貸してもらう交渉のためマルーンの町へ出かけて不在だった。誰も彼女の居場所を告げないので立腹した判事は、まずアリの小屋から火をつけたのだ。この小屋の壁には、アリがココナツ油を塗って磨いた「アベング」がつるしてあった。ナニーに似た働きを担った二人の女性への言及に、「ナニーが死んで長い年月が経った後も抵抗を続けた名もなき女性たち」¹¹⁾の存在に対する作者の関心がうかがえるのである。だが名もなき女たちの抵抗のテーマがはっきりと表に出てくるのは次の *No Telephone to Heaven* からである。*Abeng* では、特権的な階級にあったクレアが、自分の位置の不可解さに目覚め、“crossroads character”¹²⁾の悩みを抱え込む過程を描くことで終わる。12歳の少女が主人公なのだから、それはむしろ自然なことであろう。そしてタイトルは、“crossroads character”はアベングの使い方に象徴される二つの生き方のどちらかを選ばねばならないことを暗示しているようだ。

No Telephone to Heaven は、年齢も肌の色も階級も、したがって読んできた本も聞いて育

った音楽も異なる男女20人ほどの一団が、まちまちのカーキ色の軍服らしきものを着て、古ぼけたトラックの荷台で揺られながら山道を登っていく場面から始まる。彼らは何者で、どこへ、何をしに行くのかは定かでないが、共通の何かに向かって進んでいるのは確かである。トラックの脇に書かれた「天国に電話は通じない」というフレーズ（トラックの元の持ち主が書いたもので、出典不明）がトラックの車輪が立てる音のように何度もくり返される文体は、荷台で揺られる人々のせっぱつまった思い——現状を変えるために何を試してみても、何を信じてみても、突破口が現れず、どんな手立ても奪われた焦りと絶望のような思いを適切に伝えている。この一団の中に、“A light-skinned woman, daughter of landowners, native-born, slaves, emigrés, Carib, Ashanti, English” [p. 5]¹³⁾であるクレア・サヴィッジの成人後の姿がある。小説全体は、クレアがこのトラックの上で仲間と揺られながら山道を進んでいく間に、どうして自分が今ここにいるのか、過去を振り返る形をとるのだが、回想の糸はしばしば途切れ、そのつど場面はトラックの上の現実に戻る。回想の途切れはクレアの断片化した自己意識を感じさせるが、それらの断片がつながれてしだいに今トラックで進む彼女の姿に収斂していくさまは、ここに至って彼女の心身にある種の統一が生まれたことを物語っている。

アメリカへ渡ったサヴィッジ家は、“ボーイ”の意志で「パス」（世間では白人と名乗って暮らすこと）の道を選ぶが、このことが夫婦の価値観の違いを鮮明にし、キティは下の娘ジュニーだけを連れて島に戻る。そのうちには父と自分も戻るのだと思っていたクレアに母の死の知らせが届く。以後クレアは、母に置き去りにされた心の傷を引きずっていくことになる。時は公民権運動が高まる60年代のアメリカ。運動に関心を寄せることすら身元を顕す危険がある、と言って父は娘の言動を規制するが、クレアの心の底には晩年の母の手紙の一節が深く刻まれている。「あなたがいつの日か、自分の同胞（“your people”）を助ける人になってくれることを望みます。自分の同胞が誰なのかを決して忘れないようにね」 [p. 103]。

クレアは大学を終えるとすぐに父のもとを離れ、イギリスへ向かう。イギリスの大学院で、まったく自分に無関係な分野をわざと選んでルネサンス美術を専攻したものの、イギリスで出会う現象のひとつひとつに染み込んでいる植民地制度の名残りが彼女の怒りと悲しみをかきたてる。そのようなときにアフリカ系アメリカ青年ボビー（Bobby）と知り合うのだが、彼がベトナム戦争で負った足の傷はどんな治療をしても治らない。その上彼はしばしば、戦場で受けた性と人種にかかわる屈辱の悪夢に見舞われる。決して癒えぬ足の傷は決して消えぬ悪夢を象徴するかのようだ。二人でヨーロッパを放浪しているうちにボビーは行方をくらまし、彼を救えなかったクレアは消耗して故郷へ帰る。抜け殻ようになったクレアを再起に導いてくれたのは、ジャマイカの青年ハリー（Harry）である。白人の父と、その父に仕えていたアフリカ系の母との間に生まれ、肌の色と階級の点でクレアと同じ悩みを抱えている上に、少年のときに性的凌辱を受けて両性愛者になったこの青年は、まさに性、人種、階級の“crossroads character”である。結局、人の痛みを癒せるように看護婦ハリエット（Harriet）として生きる道を選んだこの人物は、クレアをある革命グループに誘う。クレアは今は住む人もなく荒廃し、野生に戻っていた祖母の土地をグループの人々に解放する。彼らはマリファナを栽培して

武器と交換し、農産物を育てて自給できない品物と交換する。クレアはあまった農産物を祖母や母がしていたように周囲の貧しい人々に配り、長い間の分裂感を回復していく。

トラックは山道をアコンボン・タウンの近くまで登り、革命グループはマルーンの子孫に食べ物を分け、一人の老人にそこから先の道を教わる。老人が語るのは、ヨーロッパの言語を幾つも学んできたクレアにはわからない西アフリカのコロマンティー語であった。目的地の森ではアメリカ資本の映画の撮影が行われている。ナニーとクジョーを主人公にした恋愛ものだ。トラックの疑似戦士たちは、ナニー伝説を骨抜きにして商品化する連中を脅して撮影を妨害するつもりだったのだろうか。総勢20人で武力革命が実現するとは思えないから、彼らの行動は“symbolic act”¹⁴⁾なのだろう。その昔ナニーは裏切りで倒れたが、結局、彼らも誰かわからぬ仲間うちの裏切りのため、アメリカ資本を援護するジャマイカ政府軍のヘリコプターから銃撃されてしまう。

クレアが仲間と共に倒れた結末を、愛するジャマイカの土に還ったのだと、一種の「成就」のように見る批評家もいるが¹⁵⁾、作者はむしろ裏切りの結末で、長年の植民地制度が住民の間に育てた相互不信の悲しさを描きだそうとしたのではないだろうか。なぜなら、この小説の冒頭、トラックの荷台の描写が始まるや、せっかく現状を変えようという共通の目的をもって集まりながら、生まれ育ちが異なる人々の間に巣くう相互不信が早くも指摘されているのである。彼らは体を寄せ合うこともせず、気も許さない。“Like when it was time for a backra to stand guard while some of the others, the darker ones, slept—or tried to sleep. Sometimes someone slept with one eye open.” [p. 5] (“backra”は白人、あるいは肌の白い者のこと。)ここに人種にからむ階級を幾通りにもこしらえて互いの差別感をあおった分断政策の名残、ポスト・コロニアルの現実がある。そしてここに、「特権」階級を自ら脱して革命グループに身を投じたクレアを作者が創造した理由もある。

しかし、作者が自分の体験の多くを投影させた主人公が死んでしまい、いわば「自伝路線」が断たれたことは何を意味するのだろうか。ナニーの後裔のテーマのゆくえはどうなるのか。その疑問に対する答えを、作者はクレアが革命グループに入るときに受ける面接の場を出していたように思える。クレアが帰郷後の二年間、ナニーに関する言い伝えも含めてジャマイカの歴史を学び、十代の子供たちに教えてきたと知って、リーダーが自分たちの関心は過去でなく現在、未来にあると強調し、子供が公害で汚染されているときに歴史が何の役に立つのかと問う。クレアは「私の学んだ歴史が私をここにつれて来たのです」と答える。“The history I have learned...rather recognized...since my return is something else. I know only that the loss, the forgetting...of resistance...of tenderness...is a terrible thing. Look, I want to restore something to these children...” [p. 195-6] ためらいがちにクレアの内から出てくる答えは、作者自身のものだったと思われる。三作目の長編は、ナニーの言い伝えとは違って公的な形で記録が残る歴史上のできごとを素材にし、資料を組み合わせながら、誰にも認知されていないもうひとつの歴史を、いわば“restore”しているからである。

Free Enterprise は、1859年10月16日のハーバーズ・フェリーにおける「ジョン・ブラウン

の蜂起」に、計画の段階で加わっていた二人の黒人女性の物語である。一人は故郷ジャマイカを離れて自らアメリカの奴隷制廃止運動にとびこんでいくアニー・クリスマス (Annie Christmas)。彼女の元の名は“queen”を意味する「レジーナ」(Regina) であるが、廃止運動に加わってから「アニー」に改める。人名「ナニー」が「アン」からの派生であることを思い起こすと、その選択に「特権」を捨てて革命家として生きようとした *No Telephone To Heaven* の主人公のエコーを聴くことができる。これは作者の創造した人物だが、彼女にその新しい名を勧めたメアリ・エレン・プレザント (Mary Ellen Pleasant, 1814~1904) は、実在のアフリカ系アメリカ人である。

Black Women in America (ed. D. C. Hine, 1993, Carlson, Vol. II, pp. 932-3) によると、この女性の夫アレクサンダー・スミスはキューバの富裕なプランターであったが、奴隷制廃止論者であり、W.L. ガリソンの仲間であった。スミスは死に際して妻に多額の遺産を与え、奴隷制廃止運動に役立てることを願った。メアリはゴールド・ラッシュの時期にサンフランシスコに来て、下宿屋、レストラン、クリーニング店などを多角経営して莫大な富を築きつつ、逃亡奴隷の援護活動に従事した。再婚相手のジョン・プレザントも彼女と同じく奴隷制廃止運動のメンバーであった。南北戦争終了後は、彼女はサンフランシスコに流れて来る黒人のための働き場所を見つける顔役のような存在であった。驚嘆すべきことに、彼女は早くも1860年代に、黒人が法廷で証言する権利を求めたり、交通機関の人種差別を訴えたりして、法廷闘争をしている。交通機関の訴訟は、*When and Wherer I Enter* (Paula Giddings, 1984, Morrow, p. 262) では1866年にサンフランシスコ・トロリー会社に対してなされたと記されており、前述の *Black Women in America* では1868年にノース・ビーチ鉄道会社に対してなされたと記されている。ローザ・パークスがモントゴメリーのバス・ボイコットのきっかけをつくる90年も前のことだ。ところが、金持ちの黒人女性であるため、「いかがわしい商売の元締め」とか「ヴァドゥー師」とかのレッテルを貼られて無視されてきた。彼女が政界・実業界の大物をも顧客にし、その弱みや秘密を握っていたために、彼女を抑圧する力もそれだけ大きかったことは充分推測できる。

小説 *Free Enterprise* では、M. E. P. とプレザントはジョン・ブラウンに3万ドルを寄付し、さらなる資金の援助も約束している。彼女の墓に、自ら望んだという碑銘、“She was a friend of John Brown” が刻まれているのは事実である。クリフは、自分の創造したアニーが精神的な絆を見いだす存在としてプレザントをよみがえらせた。作者にとっては、あの「蜂起」が記録にはないさまざまな黒人の加わる規模の大きなものであったことを示唆するだけでなく、革命の挫折を味わった二人の女性のその後の人生を描くことも“restore”の意味をもつ。アニーと M. E. P. はそれぞれ任務を遂行中にブラウン逮捕の情報を知り、生き延びて文通はするものの、二度と会うことはない。M. E. P. の方は、法廷闘争の実録からも明らかなように、生涯闘いを続けるが、アニーは世間に背を向け、ルイジアナ州カーヴィルのミシシッピー川岸で隠者のように暮らす。小説の冒頭には、1920年、80歳のアニーがようやく到達した静寂と平和の生活が描かれている。しかし、小説の終わりには、アニーがなぜ隠遁してしまったか、M. E.

P. に何度も説明しようとしてその度に書いた手紙を破ってきたその一点、記憶の中の “a point of no return” [p. 207]¹⁶⁾をついに顕す手紙が配置されている。アニーは南軍の囚人となり、女性として人間としてこれ以上ない屈辱を受け、自由を求める闘いに復帰する気力も体力も奪われてしまったのである。1898年2月に書かれたこの手紙は、「これは誰にも語らない」という言葉でしめくられている。

隠者アニーの唯一の交流は、近くの隔離地区へ忍び込んでハンセン氏病患者たちと交わす “story-telling” である。患者の中のタヒチやハワイの出身者は植民地制度の体験を語り、黒人は奴隷体験を語り、アニーはナニー伝説を語る。そうやって話すことの意義に確信がもてなくなったとき、アニーを励ますのはユダヤ教徒としての体験を語るレイチェルである。“Once something is spoken, it is carried on the air; it does not die. It, our words, escape into the cosmos, space.” [p. 59] “Story-telling” によって、今の自分たちにできる唯一のことをしているのだというレイチェルの言葉は、クリフ自身が “story-teller” である自分を励ますためのものかもしれないが、この言葉によって、隠者アニーも、闘士 M. E. P. と共にナニーの系譜に連なることになる。「分身」クレアは消えても、第一作 *Abeng* で始まったミッシェル・クリフの路線は続いているのだ。

注

- 1) *Her True-True Name, An Anthology of Women's Writing from the Caribbean*, ed. by Pamela Mordecai and Betty Wilson, Oxford: Heinemann, 1989, p. x. ここで言及されているのは、1857年に出た Mary Seacole の旅行記。
- 2) たとえば仏語圏のファノン、セゼール、グリッサン、英語圏のラミング、ナイポール、ウォルコットなど。
- 3) 人口1万3千に満たぬモントセラトから241万を越えるジャマイカまで、18種の島（ないし群島）がある。
- 4) ガイは自身がトリニダードの生まれ、ロードは両親がグレナダの生まれ、マーシャルは両親がバルバドスの生まれである。自身はアメリカ生まれであっても、両親の故郷であるカリブ海への意識を常に作品に反映させている場合は「カリブ系」と呼べるだろうし、逆に、バーバラ・クリスチャンのようにヴァージン諸島生まれながら自らアフロ・アメリカ人として認識される方を望んで仕事をしてきた場合は、「カリブ系」とあえて呼ぶ必要はないであろう。また、ダンティカやキンケイドは、アメリカ在住期間はさておき、作家活動を始めてからの年月が比較的短く、しかも常にかリブ海を描く点で「アフロ・アメリカ作家」とは呼びにくい。以上は1998年夏季アメリカン・セミナーのために来日したバーバラ・クリスチャンと筆者との一致した意見である。
- 5) Michelle Cliff, *The Land of Look Behind*, New York: Firebrand Books, 1985, p. 59.
- 6) Cliff, “Clare Savage as a Crossroads Character,” *Caribbean Women Writers* ed. by Selwyn R. Cudjoe, Wellesley: Calaloux Publications, 1990, pp. 264-5.
- 7) Cliff, *Abeng*, 1984. New York: Dutton, 1990. 以後同書よりの引用は本文中に頁を記す。
- 8) Cliff, *Abeng*, n. pag.
- 9) Pat Ellis ed., *Women of the Caribbean*, London: Zed Books, 1986, p. 27. 英米で使われている “nurse-maid” の意味とは区別されねばならない。
- 10) “Maroon Girl” by Walter Adolphe Roberts.

- 11) Myriam J. A. Chancy, *Searching for Safe Spaces : Afro-Caribbean Women Writers in Exile*, New York : Temple University Press, 1997, p. 145.
- 12) Cliff, "Clare Savage as a Crossroads Character," p. 265.
- 13) Cliff, *No Telephone to Heaven*, 1987. New York : Vintage, 1989. 以後同書よりの引用は本文中に頁を記す。
- 14) Cliff, "Clare Savage as a Crossroads Character," p. 265.
- 15) Chancy, p. 164.
- 16) Cliff, *Free Enterprise*, 1993. New York : Penguin, 1995. 以後同書よりの引用は本文中に頁を記す。

(原稿受理1998年 9 月25日)